2004年 卒業研究要旨

学校は子どもに読書を教えられるかー「高校生の読書に関する調査」の分析を通してー

伴　雄一郎

近年，子どもたちの「読書離れ」「国語力の低下」などといったことをよく耳にする．また，いろいろな調査から子どもたちの学力の低下が危惧されている．こういった現状を打破しようとした文部科学省（政府）はさまざまな施策をし，子どもたちに読書を推進しようとしている．一方，毎日新聞社の「学校読書調査」によると，子どもたちの読書量が増加しており，最近の読書量は調査を開始して以来，かなり上位の結果になっている．つまり，「読書離れ」とは一概に言えず，むしろ「読書離れ」の傾向は見られないのではないかと思われる．この読書量が増加している理由として，全国の約半数が実施している「朝の読書」や，文部科学省や市町村レベル，民間レベルでは読書を推進するために絵本の読み聞かせの実施や，家庭内で読書を習慣付けるように理解の促進を図っているからである．

では，読書が好きになる人，嫌いになる人にはどのような相違点があるのか，どうやったら読書を子どもたちに推進することができるか．こういったことを考えたいと思い，今回の論文のテーマを決定し，高校生を対象に「高校生の読書に関する調査」を実施した．

その結果，読書全般については，読書が好きな人と比べてみると，読書が嫌いな人は，本だけでなく雑誌やマンガ本も読まない人が多くなっている．また，読書が嫌いな人は，読書が好きな人より本や雑誌，マンガ本を読む冊数が少なくなっている．読書が嫌いで本を読まない人は，雑誌もマンガ本もあまり読まない傾向にあるようである．他にも，読書が嫌いな人は，好きな作家や好きな作品がない人も多く，読書が好きな人より小説を読む人が圧倒的に少なくなっている．なので，読書を児童・生徒に求める場合，読書が嫌いな人に小説を勧めてもいいが，無理して小説を勧めずに，回答が多かった「趣味・スポーツ」や「ノンフィクション」でもいいので，本を１冊読み切るという感覚の方が大事なのではないかと思われる．

学校図書館の利用などについては，読書が好きな人と比べてみると，読書が嫌いな人は，図書室に行くことを敬遠し，その上，図書室が充実していないと思っている人が多くなっている．また，小・中学校を中心に，図書室から本を借りていない人が多くなっている．読書が嫌いな人は，読書が好きな人より図書室自体が嫌いな人が多い傾向にあるようである．なので，気軽に学校図書館に来られるように，教室から近く，魅力のある学校図書館づくりが読書を推進させるためにも大事なのではないかと思われる．他にも，読書が嫌いな人は，読書が好きな人より先生やボランティアの人から本の読んでもらったことが小学校時代を中心にやや少なくなっている．本の紹介や勧めがあまり差がなかったことを考えると，「読ませる」という感覚より，「読んであげる」という感覚の方が読書を推進させるためにも大事なのではないかと思われる．

公立図書館の利用などについては，読書が好きな人と比べてみると，読書が嫌いな人は公立

図書館を利用していない人が多く，行く回数も少なくなっている．また，公立図書館から本を借りていないわけではないが，多くの本や雑誌を借りているわけではない．そして，娯楽や趣味のために本を借りているわけではない．こういったことから，行きやすくいろいろなジャンルの蔵書がある公立図書館づくりが求められるのではないかと思われる．

家族と読書のかかわりについては，読書が好きな人と比べてみると，読書が嫌いな人は，家の蔵書数が少なくなっている．また，家族から本を買い与えられたり，小さい頃に本を読んでもらったり，本を紹介されたり，本を読むことを勧められたことが少なく，家族で本の話や本の感想などを語り合ったこともない．つまり，本を読んでいなかった読書が嫌いな人は，家族の中の誰かがよく本を読むかどうかといったことはあまり関係がないようであるが，家庭内では子どもに読書を推進するような環境になかったようである．

学校教育については，読書が好きな人と比べてみると，読書が嫌いな人は，読書感想文や文章を書くこと，教科「国語」が好きではない人が多くなっている．また，文章や漢字を読む力が不足していると思い，日本語の力が不足している原因の１つとして本を読まないことを挙げた人は読書が好きな人より多かった．そして，「朝の読書」といった読書だけをして過ごしたことがある人でも，読書が嫌いな人の61%がこういった時間が嫌いである一方，読書が好きな人の86%がこういった時間が好きである．ちょっと考え方を変えると，読書が嫌いな人の４割近くが読書をするだけの時間が別に嫌いではないと回答しているのである．元々は皆，読書が好きなのかもしれないと思われる．

読書にはいろいろな良さがあると言われる．たとえば，読書をすることによって「生きる力」を育むことができるといったようなことをよく言われている．しかし，読書量は増えているが，実際には読書が嫌いな人も存在する．この調査でも約４分の１の人は読書が嫌いと回答した．彼らが読書を好きになって，もっと読書を推進することができるのか．この鍵を一番担っているのは「学校」であると考える．学校には本に詳しい司書や司書教諭が存在し，今後はもっと「朝の読書」といった読書だけをする時間がこのままいけば増加するであろう．つまり，家庭で子どもに読書を推進することはもちろんのこと，学校はもっとも子どもたちに読書を推進できる場であると思われる．子どもたち１人１人にあった読書指導ができるように，また，彼らの興味・関心がある本がたくさんあり，教室から学校図書館が近いといった学校図書館の充実を図り，読書の機会をきちんと与えることさえできれば，子どもたちは読書習慣を身に付けることができ，子どもたちに読書を推進できるのではないかと考える．